

秋田県青少年健全育成審議会  
あきた子ども・若者プラン策定部会（第1回）議事概要

日時 平成27年9月18日（金）午後1時～午後3時  
場所 秋田地方総合庁舎 6階 総610会議室

○出席者

□あきた子ども・若者プラン策定部会委員

佐々木 久 長 秋田大学医学部准教授（心理学）  
小野寺 清 元秋田県教育委員会教育長  
伊 藤 一 秋田県小学校長会  
齋 藤 和 彦 秋田県青少年団体連絡協議会長  
鈴 木 朋 子 元秋田県高等学校PTA連合会副会長

□事務局

男女共同参画課 課長 石 川 聡  
同課 班長 信 田 真 弓  
同課 齋 藤 一 弘

1 開会

2 課長あいさつ（石川男女共同参画課長）

3 部会委員紹介

名簿により部会委員を紹介。

4 協議

部会長の司会により、議事進行した。

(1)「第2次あきた子ども・若者プラン」（素案）について  
（提出資料により、事務局より説明。）

①資料による概要説明

②今後の策定スケジュールについて

5 意見交換

・部会長

まず、順番に意見をお願いする。

・委員

（現行プランを基に意見を口述）

4 Pだが、少子高齢化の社会の中で、子どもと高齢者の交流を考えなければならない。

しかし、学校に仕事を降ろすのでは進まない。学校は教育で手一杯。高齢者が学校に行くことを、地域の仕組みとして福祉担当課などでできないか。廃校はよく使われるが、子どもがおらず、遠い場所にあることが多いためうまくいかないことが多い。

小学校単位で高齢者に学校に来てもらう。どこかの教室を整備し、子どもと同様、朝に来て、独自の事業をやりながら、学校が必要なときに手伝うような体制づくりをしないと、子どもと高齢者の集合体はできない。

今、学校では、コミュニティ・スクールと言って、地域と連携してやっている。この場合は学校経営についての諮問なので、学校が中心になってやっている。今、自分が話すのは地域の高齢者に、学校に来てもらうというもので、いい例が飯島塾、昨日の新聞に載っていたが、そういうのを学校を開放してやってもらう取組を考えたらどうか。

少子高齢化の進展のところに、子どもと高齢者の交流のできる仕組みを考えるべき。

6 Pに、都市化が進む中、子どもの遊び場を作らなければならないとあるが、今は外で遊ぶには怖い時代。これも新聞に載っていたが、プレーパーク運営といって大人が遊び場を管理する。8月20日の新聞にも載っていたが、昨日の新聞にも支援金を出すと載っていた。遊び場に大人がいる。そして、子ども達を見ている。大人の管理の下での外での自然体験など子どもの遊びが必要な時代である。

8 PのNPOに関して、県や市でこうしたNPOをやってくれませんかというところまで明示して、参加者を募るようなやり方をしないといけない。NPOの立ち上がりを待つのではなく、目的を明示し、設立を促すような方策を提示したらどうか。

9 Pに離職状況が出てきているが、こうした資料を基に、今の若者は駄目なんじゃないかと言われることがあるが、離職した子どもが、その後どこに行ったか分かる資料はあるのか。離職した子は県内にいるのか、県外に行っているのか、次の資料では示してもらいたい。ある学校の話だが、その学校は進学校のため就職する生徒は少なかったのだが、市内に就職して辞めた生徒の多くが、再び市内で就職していた。転職を一概にダメと言わないで、そこまで書ければ、読んだ人が、自分のことを分かってくれてるな、地域のことを分かってくれてるなと感じると思う。

11 P、良き親になるための支援の中で、家庭が崩壊した後では、いくら手をかけてもいい家庭にするのは難しい。どういう家庭にしたいのか、家庭教育にはどういう支援があり、どういう手立てがあるのか、簡単に書けないが担当に議論してもらいたい。

13 Pに関連し、中高生に、特に高校生にはボランティアを義務化しても良いのでは。全高校生がボランティアとキャリア教育を経験する。ボランティア単位のようなものを就職時に高く評価するなど、秋田県独自にでもできないか。

22 P、安心して出産できる環境整備のところで、望まぬ妊娠に対する指導がどうしても遅れている。学校教育の場で、性教育をしっかりとやれと言われるが、教師と生徒とでは考える性教育にギャップがある。福祉保健、医者、教育（学校）が本音で話さないと望まぬ妊娠が増えると考え。これまで進めてきた性教育について、成果があれば示した方がよい。安心して出産できる環境の前に、望まぬ妊娠に対する対応が大事だ。未成年者の人口妊娠中絶数は、今どれくらいか。健康福祉部の資料で公になっているはずである。

・部会長

県の衛生統計年鑑に載っており、インターネットでも見られる。

・委員

24 P、県庁内に事業所内保育施設をつくっても良いのでは、今、子連れ出勤とか言っているが、県の仕事は子どもを見ながらできる内容でないため、適切ではないと思う。事業所内保育所を公でつくり、企業もつくってほしい。

25 P、児童虐待は、外からは分からないことが多いと言われるが、やはり難しい。民生委員が、何かあればこちらに連絡をと昨日来ていたが、町内会とか、ボランティア、NPO等に緩い権限を与えて、個人情報とかで問題が生じない範囲で、情報を交換することが必要ではないか。一般市民の目で取った情報を公で生かさないと、これから人を助けていけないのではないか。

36 Pの学校を核とした地域全体の教育力の向上は、始めに話したとおり、学校に地域が入って行けるようになればよい。

41 P、地域での健康づくりについて、学校には施設はあるが、選手用になってしまう。地域の高齢者や部活動に入っていないような子ども達が遊べるような施設を考えるべきではないか。地域の空いている場所に、芝生を張って遊び場にしたりとか行き先を作ってやらないと、家に閉じこもるか、ゲームするとかしなくなる。

42 P、多様な体験活動の推進のところだが、先に話したとおり、高校生が、夏休み等にボランティア参加してもらおうと良い。その時に学校でやってくれと言うと、ボランティアでもインターンシップでもついて行くのは日常の仕事の関係で難しく、できないとなる。

例えば、障害を持った生徒に就職活動させるときに、仕事を教えるため、退職者を再雇用したりする。この方法を誰にでも適用し、キャリア教育を推進するために、退職した人を雇用して教える。その予算を取る必要がある。高齢者の再雇用にもつながる。

44 P、国際交流は一般的には進んでいない。

スポーツで秋田県が勝てなくなったが、それは、秋田県に他県から有能な選手が来なくなったから。以前は外から連れてきていた。例えばバスケットで勝っているチームは他国から連れてきている。本県の学校でも必要な子どもを留学生として呼び、本県生徒も同様に交流すればよい。若い人を国際交流させ、留学させ、そうすれば秋田のために役立つ。それが生きた国際交流になる。

ところで、秋田では、にぎやかな音楽を演奏できるところはあるか。

・部会長

ジョイナスとかですかね。

・委員

そういう場所を急いで考えてやらないといけない。若者が自由に使える場所について。ところで、「ひきこもり」とはどういう種類があるのか。

・部会長

障害を背景にしているかとか、完全にひきこもっているかとか、多少区別はある。

・委員

全体像は把握されているのか。

・部会長

されていない。全国的な統計も推計が基本。藤里町では、小さい町なので1件1件調べたりというのがあるが。

・委員

できないことはないと思う。高校または、特別支援学校高等部を出るときに連携すればできる。卒業時に市町村の福祉と連携すればできる。高校卒業時に把握して、リストアップしておけば、それを名簿にして様々な支援・助言ができる。

・部会長

前の課長とも、そういったデータベースを作ることができれば、早い段階で支援の必要な人を、もれなく確認できると話したことがある。

・委員

高校・特別支援には、どこに就職したかを含めて情報が全てある。福祉でこれを引き受ければ、原本となる。来る人に対応していても埒があかない。行政としては、卒業時にリストアップしておけばその後いろんな動きができるのではないかと。基本的な連携相手は市町村単位になるのか。

・部会長

以前、データベース化が進まなかったのは縦割が理由である。自分たちが持っているデータをほかの部署に渡せないということであった。

・委員

個人情報として切り捨てるのではなく、どうすれば関わる全員を最後まで面倒見られるシステムとなるか、是非検討してもらいたい。

この職種に就く人は県職員でも役場職員でもいいが、中心となるのは専門家でなければならない。いつでも専門家の立場での配慮が必要である。

今、子どもの貧困が言われているが、それにどう対応するかを今回のプランに書かないといけないのではないかと。

・事務局

今、子どもの貧困については、福祉サイドで計画を進めているので、新たな対策を含め、どのようなものがあるのか情報を集めているところと聞いている。

・委員

育英会では、県内就職した場合には、奨学金を減免するという事で運動している。それは、先日の新聞にも載っており、実りそうだが、子どもの貧困に対して、秋田県として何が出来るか、どう対応するか、項目が必要ではないか。

54Pの若者文化への支援等に関連して、秋田県の大学生が、秋田県のことをどう想い、何に不満を持ち、どのような支援ができると思っているのか1ページあってもいいと思う。

NPOにしても、大学生にこんなことを期待するといったことがあったもいいのでは。各大学にこのようなNPOを作ってもらい、大学生として関与してもらえないかとか、こういう事業を望んでいるので大学生が集まってやってもらえないかなとか、大学生を動かすことを考えてもいいのではないかと。同時に大学生のやっているアルバイトの調査とか、ブラックバイトといったものがあるのかどうかなど、大学生を調査し、活用するページがあってもいいのではないかと。

・部会長

大学も、今は地域との関わりを大事にしている。県としてもそのような目で見てもらえると繋がりやすい。

・委員

NPOでもボランティアでも有償にすべきと考える。ボランティアに行って、せめてガソリン代くらいはとか、よく言われる。どのくらいかは別として、ガソリン代・飯代くらいは支援しないと口先だけになる。

・部会長

ページを追って、指摘していただいたおかげで、私たちも前回のプランを確認できた。委員は実情をご存じなので、分かった上でお話いただいたが、これ位言って何パーセントかが反映する世界ではあるが、言わないことには始まらないので、貴重な意見ありがとうございました。

次、お願いします。

・委員

全体の印象として、リニューアルされたページとそうでないページがあり、リニューアルされたページには前向きさを感じるが、そうで無いページは前回と全く同じである。今の時代のエッセンスを入れなくていいのかということがあり、この部分を検討したい。

課題の資料があるが、課題で述べられたことが、必ずしも中身に反映されていない。課題の中で述べられていることについて、どういう施策をやっていくのかを、プランの中で練っていくのだと思うが、それについては、新しいエッセンスを入れていく必要があると感じた。一つお尋ねしたいのが、担当の課がそれぞれのページの見直しをするのか、あるいは、事務局が見直しをするのかどちらなのか。なぜかという、それぞれの課題に対する施策はそれぞれの課が持っているもので、盛り込むためにはそれぞれの課と連絡を取る必

要があると思うので、どういうシステムになっているのかお聞きしたい。

・事務局

前回のプランの際には、各施策ごとに幹事課を定めた上で、関係する課を作業課として作業にあたり、幹事課がとりまとめる形でプランを策定した。今回のプランでは、幹事課は設けていないが、当時の担当課に見直し等について作業依頼したほか、新たな視点については、別途作業依頼した。

・委員

そういう意味では、課題が施策に反映されていない場合に、所管する課に働きかけることはできるということか。

・事務局

可能である。こちらとしても、課題等を記載整理する場合には、プランの本文をベースに検証するようお願いはしている。

・委員

例えば、ふれあいサンサンデーが認知されていないとあるが、プランを見たときに認知させるためにこういうことをすると書いていないため、「あれ？」といった感じになる。課題とプランが整合しているか確認するためには、もう少し所管課に突っ込んで聞いてみたいと思う。

次に中身の方に入るが、3Pのところ、NPO頼みという印象を受けた。積極的に働きかけていかないとプランの推進はできないのではと思う。成果が上がらないNPOもあるだろうし、県が関与していかなければ改善していかないだろうし、現状ではNPOに頼るという印象が強いと感じた。

6P、都市化というところを最初に見たときに、今の秋田に当てはまるのかと感じた。また、今現在、逆に子ども達は原っぱに出ていない。家の中で遊んでいて、ひきこもりの状態に近い子どもすらいる。遊ぶ時は家の中で遊ぶ子ども達が大半を占めている。そうした目を見たときに、どうしていくか、今は、場はあるのに家の中にいる訳で、場はあるのに遊ばない、では何が必要なのか、踏み込んで行かないと改善にはならない。学校の現場でも問題になっているところである。体力づくり・健康増進といった事にも関わるので大事な項目だと感じた。「自然体験など様々な体験の場を提供していくことが大切です。」は、5年前のことで今は、一步踏み込むことが必要。

25Pの虐待については、社会的にも大きな問題になってきている。学校が見つかる場合もあるが、近所が見つかる場合も多い。ただ、それを待つだけだと後手後手に回ってしまう。「児童虐待防止対策の推進」について、前回はある程度書かれていたが、今回は防止対策と一つに言葉だけで収まっている。虐待防止対策は、進めて行かないといけなさと懸念している。

29P、「心身の健康づくりの推進」で、「スポーツ立県あきた」については、前々から推進しているが、順位が少しずつ低下してきている、これに対する具体的な取組が見え

ない。何かしら欲しいと感じた。学校でも体力の低下は感じるところであり、食育の部分と合わせ考えていく必要があると感じた。

32Pの要保護児童に対する支援の中にも、児童虐待防止活動の推進があり、その2行目に、「周知啓発活動により」とあるが、こども具体的な施策でカバーしていかないといけないと感じた。

34ページの基礎学力の向上で、「学習状況調査の実施や教育専門監の配置等により各学校の授業力を高め」とあるが、実施したからとか、配置したから高まるということではなくて、これをベースに授業改善をしていくことが非常に大事なことで、言葉が足りない感じがする。そうでないと、調査をやればいい、配置すればいいというイメージを持たれてしまう。

多様な体験活動のところに、ずっと前から農山漁村での宿泊体験活動とあるが、そのほかに新たな地域資源を生かしたとか、例えば、シェールガスとか風力とか様々あると思うが、そうした新しい部分に目を向けた体験活動を盛り込めないかと感じた。

35Pの小中連携だが、「生徒指導の充実」とあるが、今現在成果の上がっていることにスクールカウンセリングがあり、小中同じスクールカウンセラーを活用しながら連携を図っているケースもある。そうした専門的な分野での連携はこれから重要になると考えている。

37Pのいじめの防止と不登校については、これまでと違った内容にしていく必要があると感じている。学校でも今、いじめの未然防止に向けた取組を大切にしている。対応も大事だが、いじめを起こさない学校というのはどうすればいいのか、子どもを主体とした取組など様々な取組が行われているので、このいじめ防止については、精査する必要があると感じた。

・委員

これから5年あるので、これからこうしていくということを、教育委員会の方針としてもう少し書かせた方がよい。

・委員

52P、就職についてのことだが、大卒の若者に聞いた話では、Aターン希望者について、県外にいと、他県に比べ、秋田からの就職説明がコンパクトだという。戻ってこようと思うのだが、なかなか戻れないという。Aターン希望者への取組については、もう少し間口を広げて大々的な取組をしていかないとな成果が上がらないのではないかと感じている。雇用先はたくさんあっても採用人数が少ない。受験しても仕方が無いと思う人がたくさんいるという。

54P、若者文化への支援について、若者が楽しめない街というイメージが秋田には強いのではないかと。先ほどの音楽の話にもあったが、若者が何かをしようと思ってもできる場所が少ない。若者達が自分たちのしたい活動をする場所が少ない。産業面だけでなく、そういったところももう少し膨らませていけたらと思う。

・委員

若者文化への支援はどこが担当しているのか。

・事務局

ここの記載については、文化振興課が担当した。

・委員

大学生や社会人にこういう機会を与えると、旧県立美術館をこういうふうに直すと具体的なものがないと、物は動かない。ただそうすると、担当課は予算をそちらで取ってくれとなるだろう。そうするとそちらでは予算とることはできないだろうから。

・部会長

書かないことには動かないし、予算のことは県庁の中の問題。私たち県民にすれば税金払ってるし、どこも厳しいのでその中で工夫してくれということで、できないのはしょうがないが、こうなって欲しいというのをこのプランに出してもらいたい。

・委員

言わないと始まらない。事務局として大学生と話してみるといい。どういう支援が動きやすいか。

・部会長

もし良ければ私の授業に来ないか。個人と社会というテーマで、どういう会社をつくれれば儲けられるかというシミュレーションしたり、そういう授業がある。

・委員

全体として大学部分が相当落ちている。大学は学術振興課に書いてもうらうのか。

・部会長

次、お願いします。

・委員

ボリュームがあり、多岐にわたり難しいが、若干意見を述べたい。

子どもの教育についてだが、小学校であればスポ少、中学校であれば部活と忙しいのかなと思う。その中で、空いた時間に何をするかということで、公民館であるとか、生涯学習に時間を割いてもらえれば、地域とのつながりが密着になると思う。国際化への流れということで重点的に触れられてはいるが、34Pに、「ふるさと教育の推進」で自然・文化に触れていくと書いているが、正しい秋田弁を何人がしゃべれるのかなと。秋田弁も素晴らしい文化なので、残していきたいし、残すべきものだと思う。公民館とかでの生涯学習系にも力をいれてもらいたい。

就職についてだが、離職率について触れられている。大学生であれば様々なバイトを経



験できるかもしれないが、高校生であれば3年間という期間の中で、たった一度の職場体験やインターンシップで仕事を決めるということで、合わなければ辞めるということも、ある意味では切り替えの早さということで次につながるのだと思う。

自分に合った仕事を見つけるといことで、職場体験をやってはいるとは思いますが、進めてもらえればと思う。秋田県内に自分にあった仕事が無ければ、県外に行って、見つけるのも有意義な事だと思う。県内に残って欲しいというのは県民の総意だとは思いますが、個人のライフプランとして考えた時には、やりたいことをやっていければと思う。

秋田に離職して戻る場合には、何らかの支援があれば、両親の介護など自分の意思と違うことで戻る人が結構多いので、そういうことも含めてできればと思う。

大学生について、日赤さんとか、職場が看護師とかであれば大変みたいである。献血のボランティアとか立ち上げたりしているが、そんなに時間が取れないようだ。

大学生は、比較的他県からも入ってくるので意見も聞ける。限られた期間で秋田県に何を残してくれるのか、取り入れていければと思う。

・ 部会長

次、お願いします。

・ 委員

この冊子を読ませてもらい、書かれていることが県民に周知されているのかなと思った。

普通の人にどれだけ知られているのか。先日のセミナーも関係者ばかりで、それ以外の人はいなかったなど。どういう風に知らせたらいいのかなと感じた。

子どもと老人を一緒にということについて、どこで見たかは忘れたが、保育園と老人施設が一緒になってるところがある。お互いに活性化されるし、保育園の方は、両親が仕事をしているので、子ども達も、なかなか大人とふれあうことが少ないため、老人と一緒に楽しい。ただ、今の若い人は、老人に子どもを預けるといのに不安を感じるのではないか。例えば、落とされたらどうしよう、自分が食べているものを(子どもに)食べさせたらどうしようなどが考えられる。ただ、私自身は、お互いに子どもと老人それぞれにいいなと感じた。

2番目に、個人情報保護法がいろんな面で邪魔している。名簿も出ないし、どこにだれが住んでいるか、地域の中ですら分からない。それをもう少し緩和してもらえる方法がないかと感じた。

学校の施設開放についての話があったが、週一回、水曜日7時から9時まで、体協の管理で小学校を開放しており、誰が行っても自由に使える。ただ、私も一度行ったが、スポ少の子どもが残っていて、これってどうかなと感じたことはあった。

ひきこもり、障害者のところで、小・中連携できていないところもある。小学校卒業して、中学校行ったら、注意しなければいけない点について、連携が無いばかりに中学校に行けなくなった子どもも見ている。連携は必要だ。病気のこともそうだし、特殊な何かもあったり、言葉のこととかも。連携をしてもらえればありがたいと感じる。

53Pのところに「社会人の学習機会の提供」とあるが、あきたスマートカレッジ、私も行っているが、若者はいない。60代、70代が中心。

先ほど話が出たが、若者が楽しいと思う街づくり。子どもが少ない・生まれないと言うが、子どもを産む世代の人がいないから。20代から40代の人が秋田で暮らせるような職場とか、楽しみもそうだが、そういう人たちが増えないと絶対に子どもは増えない。これも先ほど話が出たが、秋田に就職する人の奨学金を援助する、私も新聞を読んであれいいなと思った。少しであっても返さなくていいのであれば、貢献しようかなという気持ちにもなるのでは。

・ 部会長

他に、何かないか。

・ 委員

環境浄化部会の中で、良い本、推薦図書を選んでいますが、本を通して子ども達の心を育てるよう力を入れて取り組んでいる。県民読書の日などもあるし、本県では様々な取組をしているが、この中に出てこない。本を通じて子ども達の心を育てるといったことが出てきてもいいのかなと。

・ 部会長

そうですね。とても大事なことですね。

・ 委員

薦めるのもそうだが、本当は市町村に本を買って置いてくれと言うところまで書かないと意味がない。県から出す場合には、このような優良図書は子ども達にできるだけ読ませるようにと。市町村長・教育委員会は、子どもが身につくような政策を進めてくれと、そういうような文章にならないと意味が無いと思う。

・ 部会長

その辺も、もし具体的に書き込めるようであれば。

・ 事務局

読書については、読書を進める条例もあり、関係各課で取り組んでいるのでそのあたりは書き込めると思う。

・ 部会長

資料の最後の方に体系図があるが、この中で一番右端の施策を構成する柱、これが県の具体的な事業の裏付けになるので、今日話されたことをここに書き込めれば、少し前に進むのかなという風に思った。

改めて、戻る形だが、発達のサイクルで（プランを構成する）というのは問題無いんですよね。前回から取り入れたことだが。そういう意味で、少子化対策本気で考えますか、というのは、人口70万という数字が出てから、ある意味で皆無責任になり、どうせ減るんだからということで、子どもを減らさないとか、若者を秋田に留めておく覚悟がどこま

でなのか確認したいのですが、課長さんいかがですか。

・事務局

今、秋田版総合戦略を策定中であるが、その作業の中で、人口の推移など課題を提起した上で、少子化対策であるとか、先ほども出たが、学生に対する奨学金の話とか盛り込んで、議会等の意見をいただいている段階である。総合戦略での話とプランにでている対応は、オーバーラップする部分もあるとは感じている。総合戦略に出てきた新たな取組については、プランの中にも反映されるべきものがあると考えており、そういう意味では、総合戦略とこちらのプランの整合性をとる必要があると考える。

・委員

教え子でフランス人と結婚している女性から聞いた話では、フランスでは事実婚が普通の結婚ということ。それでも同じ保障を受けられるようになっている。子どもが2人、3人生まれると働かなくていいという制度になっていると聞いた。

だからフランスでは子どもが増えている。日本でも事実婚を認めれば子どもは増える。だが、行政として今書くのは難しいかもしれない。

・部会長

うまく表現を変えてそういうことも書いておかないと、土台がそこであればせっかくいいプランを作っても意味がないと感じる。知恵はないか。

・委員

事実婚は必要という学者もでてきてはいるが、なかなか社会全体として受け入れ難いかもしれない。

・委員

家制度ですね。女偏に家と書いて「よめ」というくらい。女性は今、一人でも生きていける。結婚して何かいいことがあるかという、あまりないという。うちの娘に言わせると「イクメン」という言葉が間違っているという。そういう言葉が、わざわざあるのは、子どもは女性が育てるのが当たり前ということだと。子育ての負担は当然女性が重い。職場に保育園というのはすごくいい案だと思うが、そういうことが充実すればちょっと違ってくるのかなと。

・部会長

そういうポイントを入れていくことが、秋田が変わっていくチャンスだと思う。施策のどっかで多様なライフコースだとか。今までにないものを考えているんだよ、というメッセージを若者に送ることができるのではないか。

同棲して子どもができたなら結婚というのも、それを周りが認めてあげればいいだけのこと。若者には、性行為をするときには、人類の存続に関わる覚悟をしろと話している。もしかしたら、子どもができるかもしれないという相手としか、そういう行為をするなど、

大学では教えている。そういうことを、若いときから伝えられたらいいんじゃないかと思う。

もう一つは、今、支援の必要な若者に関わっていて思うのは、困ったことがあった時に、助けを求める力をどこかで身につけさせたい。

今、親子関係が難しくなっているが、親以外にも頼れる場所が県内にはこれだけあるとか、小学生でもSOS出したかったらここに電話すれば話聞いてもらえるよとか。中学・高校生で、学校の先生には言えないことを聞いてもらえる、性の問題で悩んだとき話を聞いてもらえるなど、全ての若者に提供したい。

・委員

大人では無く、小中高の性の問題に相談できる大学生のNPOもいいのではないかな。そうすると、若者が若者を支援するという、いい場ができていく。

・部会長

プランの体系図のところ、「目指す社会」の表現は、これで良いか。例えば、「大人が、お互いに」を取り、「子ども・若者を尊重し、全ての世代が支え合いながら共に生きる」にして、大人として、若者達にこのプランで、あなたたちのことを大事にしているよというメッセージを伝えたいなと。なにか、いい案があれば事務局の方をお願いします。

基本目標にある「困難を有する子ども・若者の支援」のところ、データにもあるように非行・問題を起こすと言う形での困難の訴えが少なくなり、問題が潜在化している。そこに手を差し伸べる方法の一つが、相談していいよ、ということなのですが、他にも何かないか。

・委員

20代で結婚しても安心できる社会を作らなければならない。

・部会長

このプランでも、39歳までに結婚し、子どもを産み育て、次の世代へと一周する。そういう意味では、このプランも、乳幼児期という時期を過ぎ、学童期に入り、まだまだ途上だがそろそろ人生を考える時期でもある。

スポーツの話で言うと、一番運動に適しているのは幼児期から小学生。その時期に外で遊ばないというのは、ある意味、致命的なこと。だから、秋田県では、全員登山するとか、川で泳ぐとかサバイバルする力を育てたら一生支えになると思う。

・委員

参考に、男鹿市長は、走ること、泳ぐことは全ての子ども達にやらせてくれと話している。そのため、退職した体育教師を学校に派遣したりしている。

・部会長

体を鍛えることで、思春期になって体が大人になった時に、自分に自信をもって男女が

出会ってという感じになる。

・委員

遊び場（プレーパーク）を管理するのは、どこの部署になるのか。

・事務局

昨日のニュースになったのは、クラウドファンディングに手をあげたところで、子育て応援Seedという団体が上新城で展開している里山学校である。あと、把握している範囲では、秋田市では桜にあるあきた冒険遊びfrogで、放課後の児童が遊べる環境を整えている。また、能代でも冒険遊び場プレーパークということで不定期で、月2、3回ですかね、外遊びを自由に行わせている。

・委員

そういうことを文章で書いたときに、現実に行われていることを資料として添付したらいいかもしれない。

・事務局

ただ、全て自主事業として、それぞれの団体が行っている。

・委員

では、県でそういうのを進めるとすればどこでやるのか。

・事務局

助成金制度とかあるので、そういう方達が使いたいと手をあげてもらえれば、助成するという形は整っている。

・委員

健康な体の元に、健全な精神は宿るので、子どもが汗水たらして遊ぶような事業をつくらなければならないといけない。今は心配で子ども一人では外に出せない。

・事務局

現在、プレーパークそのものへ助成する事業はないが、例えば青少年育成団体や若者団体が行う事業に助成金を出すことができ、例えば、その中でプレーパークをやっている団体とか、伝統芸能に取り組んでいる団体とか、子どもの健全育成に取り組む団体とかに助成金を出すことが可能である。それであれば私の課でできる。

・部会長

ネットに関して言うと、大学生達は、自分たちがそろそろやばいと気づいている。スマホを使い過ぎるとどんな弊害があるかというテーマで調べたりしている。私たちもそろそろ、そっちから引き離すチャンスかもしれない。

子どもも、ゲームよりそっちが楽しいじゃないかと、そういうタイミングだ。5年経ったら手遅れ。できたら、プレーパークについての提案を受け止めてくれる課を検討してもらえたらと思う。

子どもは、変化が早い。子どもを待たせてはいけない。皆さんの声が少しでも反映されれば、それだけ早く届くと思うので、是非頑張っていきたいと思う。

では、本日の会議はこれで閉じます。

次に、次回の日程ですが、ここからは、事務局の方からお願いします。

- ・事務局

10月20日か、28日で調整したいがいかがか。

- ・(委員より)

(10月28日であればの声)

- ・事務局

10月28日であれば皆さん都合良いと言うことでよろしいでしょうか。

(異議無し)

それでは、次回は、10月28日に開催します。

本日は、忙しい中お集まりいただきありがとうございました。

## 6 閉会